

まきひめづか ごりんせきとう
牧姫塚の五輪石塔

種 別	小松市指定文化財 建造物
指定年月日	昭和40年11月3日
所 在 地	牧口町

五輪塔とは、古代インドにおいて宇宙の構成要素と考えられた空・風・火・水・地の五つを表す塔である。下から方形の地輪、円形の水輪、三角形の火輪、半円形の風輪、宝珠形または団形の空輪の五輪を積み上げて構成される。供養塔や墓標として、鎌倉以降多く作られるものである。

この石塔は、粟津温泉の東部・牧口町の水田地帯の中に残る中世墓で、地中からは石の箱に入った甕1点と土師器はじきの小皿14点が出土している（甕は「加賀古陶」として別途市指定文化財となっている）。この墓は牧姫塚と呼ばれ、皇女牧姫がこの地に流され、死後築いた塚に都から下賜された石仏を立てたとの伝承がある。また石塔の周囲には火輪・空風輪各一点、灯籠一対、明治10年に建てられた石標が存在する。

五輪塔の総高は93センチメートル、幅は最も大きい地輪で45センチメートルである。水輪には三体の坐像が浮き彫りされており、像容は不明だが主尊と脇侍からなる三尊像とみられる。

この塔は花崗岩の同一石材が用いられ、完形のものともみられる。県内の五輪塔は、材料の入手しやすい安山岩や凝灰岩が使われることが多く、この石塔は花崗岩製石塔の分布の中心である近畿地方から搬入された可能性が高い。製作時期は14世紀の前半～中頃とみられ、被葬者は在地領主に連なる有力者、または僧侶とみられる。

